



説教要旨 「信じる者は救われる？」

ルカによる福音書8章40～56節

会堂長ヤイロがイエス様の足もとにひれ伏して、いのちの危機に瀕する幼い娘の癒しを願い出ます。死という現実の前においては、地位も人間的な力も無力です。ヤイロは無力さの中でイエス様にひれ伏し、救いを求めたのです。

イエス様がヤイロの求めに応じてその家に向かう道すがら、群衆に紛れて十二年間出血の止まらない女がイエス様の服に触れて癒されたということがおこりました。その時、主イエスは振り返り「わたしに触れたのは誰か」と自らに触れた人を捜し始めます。ヤイロの娘は死にかけているのに、何を暢気なことをしているのだと思います。案の定、ヤイロの娘の死が告げられます。「お嬢さんは亡くなりました。もう、先生を煩わすには及ばないでしょう」。

少女がまだ生きていた時なら、イエス様に来て頂いたら助かったかもしれない。しかし、死んでしまった今はもう、この人に頼っても無駄だ。そのように考えているのです。イエス様がヤイロの家に着くと、そこには娘のために泣き悲しむ人々がいました。人々は、「眠っているのだ」というイエス様をあざ笑います。死に直面して、悲しみに暮れ、泣きわめきつつ、イエス様をあざ笑うのです。イエス様であっても死の前に泣き悲しむことしかできないと見くびっているのです。

イエス様は、泣きさけび、あざ笑う人々を横目に家に入り、娘の手をとり、「娘よ。起きなさい」と呼びかけ、その言葉によって少女はすぐに起きあがりました。私たちには抗いようのない死という現実さえ、イエス様にとっては眠っているのとかわりない些末なことなのです。だからこそ、あのときイエス様は慌てることなく足を止め、御自分の服に触れた者を探されたのです。

イエス様にとっては、寝ているのと変わらない少女の死よりも、この女性と出会って関係性を築くことがなにより重大事だったのです。彼女の救いは、病が癒されたことではありません。イエス様が出会ってくださり、イエス様が赦してくださった。ここに本当の救いがあるのです。

(2019・1・20 説教者：稲垣真実)